

新約聖書 ルカによる福音書 20章27節—38節(新共同訳)

²⁷さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。²⁸「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。」²⁹ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えたが、子がないまま死にました。³⁰次男、³¹三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。³²最後にその女も死にました。³³すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」³⁴イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、³⁵次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。³⁶この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。³⁷死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。³⁸神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「生きている者の神」

本日の福音書では、直接その名前は出てきませんが「レビラト婚」と呼ばれる規定をめぐって、サドカイ派の人々とイエスが問答をしています。

レビラト婚とは、子がないまま亡くなった夫の代わりに、その兄弟が未亡人と再婚するという、世界各地に見られる婚姻の慣習です。「レビラト」とは、「夫の兄弟・義理の兄弟」を表すラテン語に由来しています。レビラト婚の主な目的は、家系の子孫を絶やさないようにすること、家の資産・財産を守ることです。

本日の福音書で、サドカイ派の人々がイエスに投げかけた議論は、このレビラト婚が根底にあります。ここでのサドカイ派の議論は次のようなものです。

七人の兄弟がいて、長男が妻をめとりましたが、子がないままに長男が死んだので、その弟が兄嫁をめとつて自分の妻としました。その間で生まれる子供を、兄の子とするためです。ところが、その弟も子がなくて死に、続いて彼女をめとった兄弟も次々と子がないまま死んでしまい、最後にその女性も死んでしまったというケースを、サドカイ派の人々はイエスに語ります。そして、サドカイ派の人々がイエスに問うたのは、もし復活があるならば、一体この女性は復活後に誰の妻になるのか、ということです。兄弟の七人ともが彼女を妻にしたので、理屈から言えば、復活後、彼女は七人の夫を持つはずです。ところが、一人の妻が同時に複数の夫をもつ一妻多夫(いっさいたふ)は聖書の許すところではないので、神の前で矛盾が生じるというのです。

コリントの信徒への手紙 — 15章 35節にも、死者の復活を疑問に思う人のことがこう記されています。

「死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません」。

この問いかへの、イエスの答えはこうです。イエスは、今私たちが生きている「この世」と、来るべき「次の世」では、私たちの存在自体が全く異なったものになると言います。つまり、この世においては、子孫を残すために、めとつたり嫁いだりということが行われますが、次の世に入って死者の中から復活するにふさわしいとされた人々は、もはやめとることも嫁ぐこともないというのです（ルカ 20:35）。つまり、人の世においての婚姻関係は、この世限りのものだということです。

そしてイエスはこう言います。「この人たちは、もはや死ぬことがない」（ルカ 20:36）。これは、復活にあずかる者は、もはや二度と死ぬことはない、ということです。

それは、創世記 3章 19節に「塵にすぎないお前は塵に返る」とあるように、私たちの肉体が土の塵で造られていることと関係があるでしょう。土の塵で造られたものである限り、死は免れません。元来、そのようなはかない存在が、復活にあずかるともはや死ぬことがないとイエスは言います。それは、土の塵で造られた体ではない、新しい体が与えられるということです。

本日の福音書で、最も印象的なイエスの言葉の一つは、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」だと思います（ルカ 20:38）。

これは、力強い響きを持ちながらも意味が少し分かりにくい言葉だと思います。この言葉は、「わたしはこの人の神である」と神が宣言なさる時、その宣言をされた人は、たとえ既に死んだ人であっても生きているということです。なぜなら、神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神だからです。

続けてイエスはこう語ります。「すべての人は、神によって生きているからである」（ルカ 20:38）。

「神によって生きる」とは、「神に対して生きる」ということです。人は、神に対して、つまり神との関係、交わりにおいて、本当の意味で生きることができます。そして、神にとって、ただ肉体が生きていることよりも、その人が神によって生きているかどうかが問題なのです。神が私たちをご覧になって「あなたは生きている」と言ってくださる時、私たちは生きているのです。

命は神から來ることを、イエスは私たちに伝えます。人間は不死ではなく、人間はいつか必ず肉体の死を迎えます。死の向こうに生があるなら、それは、神の愛を受け入れ、この世での生において神との関係に入った人々への神の賜物です。

復活の希望は、今あるものの延長線上に存在するのではなく、新たなるものの到来です。この地上で与えられている義務や重荷も、すべて終わりを迎えます。

イエスはそのように復活の命にあずかる人々のことこう言い表します。「この人たちには、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである」（ルカ 20:36）。

天使とは、神に近く仕える者で、人間が持っている様々な制約から解放された存在です。そして私たち人間もまた、神によって、天使のような存在となることができるのです。

私たち人間が、肉体をもって生きている時、いつ何時でも天使のような存在になることは難しいでしょう。ですが、いつでもそうはなれなくとも、私たち人間は、この地上で肉体をもちながらにして、天使のような存在になることができます。

私たち人間が、天使のような存在になった時、私たちは何ができるでしょうか。

それは、苦しんでいる人を、主イエス・キリストの心の部屋に招き入れるように、自分の人生の中に招き入れることではないでしょうか。

神は私たちに、復活の希望と共に、この地上においても、新しい歩みを与えてくださいます。

私たちは、この肉体をもって地上での日々を歩む時も、肉体の死を迎えた時も、神から「生きている者」だとみなしていただけるような生き方をしていきましょう。

私たちは、神のゆるしと愛のもとに生かされていることを覚えながら、希望と喜びをもって共に歩んでいきましょう。

お祈りをいたします。

天の神様。あなたの英知は私たちの思いを超えて、私たちを復活の希望へと招いてくださいます。私たちが、あなたから与えられたいのちをもって、日々を歩んでいくことができますように。御子 主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

* * * * * 説教ここまで * * * * *

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 ヨブ記 19章23節—27節a（新共同訳）

²³ どうか／わたしの言葉が書き留められるように／碑文として刻まれるように。

²⁴ たがねで岩に刻まれ、鉛で黒々と記され／いつまでも残るように。²⁵ わたしは知っている／わたしを贖う方は生きておられ／ついには塵の上に立たれるであろう。²⁶ この皮膚が損なわれようとも／この身をもって／わたしは神を仰ぎ見るであろう。²⁷ このわたしが仰ぎ見る。ほかならぬこの目で見る。

新約聖書 テサロニケの信徒への手紙二 2章1節—5節と13節—17節（新共同訳）

¹ さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストが来られることと、そのみもとにわたしたちが集められることについてお願ひしたい。² 靈や言葉によって、あるいは、わたしたちから書き送られたという手紙によって、主の日は既に来てしまったかのように言う者がいても、すぐに動搖して分別を無くしたり、慌てふためいたりしないでほしい。³ だれがどのような手段を用いても、だまされてはいけません。なぜなら、まず、神に対する反逆が起り、不法の者、つまり、滅びの子が出現しなければならないからです。⁴ この者は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して、傲慢にふるまい、ついには、神殿に座り込み、自分こそは神であると宣言するのです。⁵ まだわたしがあなたがたのもとにいたとき、これらのことを行なっていたのを思い出しませんか。

¹³ しかし、主に愛されている兄弟たち、あなたがたのことについて、わたしたちはいつも神に感謝せずにはいられません。なぜなら、あなたがたを聖なる者とする“靈”的力と、真理に対するあなたの信仰とによって、神はあなたがたを、救われるべき者の初穂としてお選びになったからです。¹⁴ 神は、このことのために、すなわち、わたしたちの主イエス・キリストの栄光にあずからせるために、わたしたちの福音を通して、あなたがたを招かれたのです。¹⁵ ですから、兄弟たち、しっかり立って、わたしたちが説教や手紙で伝えた教えを固く守り続けなさい。¹⁶ わたしたちの主イエス・キリスト御自身、ならびに、わたしたちを愛して、永遠の慰めと確かな希望とを恵みによって与えてくださる、わたしたちの父である神が、¹⁷ どうか、あなたがたの心を励まし、また強め、いつも善い働きをし、善い言葉を語る者としてくださるように。

教会讃美歌 151番「ひとの目には」、238番「いのちのかて」、289番「すべてのひとに」。